

## 第九章 兵庫国体

平成十八年度の三年生

前川（川棚）峰（土井首）野村（有家）泉谷（深江）大宍（深江）高崎（兵庫）森（熊本）

### 一 ジュニアオールスター

平成十八年度に高校三年生になる選手たちは、実は中学二年生の三月末に行われたジュニアオールスター大会で優勝している。しかも、その時のスタメンは吉田（純心中一六二cm）・平川（純心中一六〇cm）・小川（純心中一六〇cm）・泉谷（深江中一五九cm）・大宍（深江中一六〇cm）がスタメンという超小兵軍団だった。小さいからといってファイブアウトではオフENSEの組み立てが難しいので誰かにインサイドプレイをさせなければならぬ。その役は小川だった。

小川は小学生の頃はミニバスと空手（叔父が空手家）の両方をやっていた。空手では小学生の全国大会で三位になったこともある。格闘技をやっていたのでポイントエリアの競り合いには強いのだ。インサイドのオフENSEだけでなく、相手のセンターを守るのも小川の役目である。決勝戦までの全試合、一〇cm以上の身長差がある相手を当たりの強さでねじ伏せてしまった。

その選手たちが高校では分散した。吉田は福岡の中村学園に進学したが、平川と小川は純心高校に進学した。泉谷と大宍は鶴鳴に進学した。六番手で使われていた兼頭（橘中一六五cm）は長崎西に進学した。この選手たちが高校でどんな活躍をするか興味深い年である。

それは、平成十八年の夏のはなしになるが、まずは平成十八年度のチームに切り替わる平成十七年一〇月の地区新人戦の模様から追いかけていくことにする。

平成十七年一〇月 長崎地区新人戦 優勝 スタメン 泉谷 前川 高崎 浜本 磯野

### 【案内文書】

主力選手とて起用される選手に必要な要素は、場面理解力、身体の丈夫さです。身体の丈夫さとは、おおむね筋力と心肺機能を指します。その他、シュート力とかディフェンス力とか精神力とかいろいろありますが、それらは絶対条件ではありません。場面が分かる、するとワンプレイごとに「ヨシ！成功だ」とか「もうちょっとだったな」とか「今のはダメだったな」という感想が残ります。感想が残るとそれを参考に「次も成功させよう」とか「これを直さなければならぬ」という思いをもって次のプレイに取り組めます。

そうして練習を続けて行けば確実に進歩します。感想も残らないし思いもないプレイはいくら回数を重ねても進歩には繋がりません。でも、思いはあっても思い通りに身体が動かなかったらプレイを試すことができませぬ。ですから二つ目の身体の丈夫さという要素も絶対不可欠なんです。

さて鶴鳴の主力選手として働いてもらわなければならない選手は今のところ、A・B・C・D・E・F・Gの七人ですが、この七人について前述の要素を吟味してみます。以下は私の身勝手な判定基準ですが、レベル五が全国上位レベル、レベル四が全国中位レベル、レベル三が県大会上位レベル、レベル二が県大会中位レベル、レベル一が県大会下位レベルとします。

A 場面（三）身体（三）・B 場面（二）身体（三）・C 場面（三）身体（三）・D 場面（二）身体（三）・

E 場面（二）身体（四）・F 場面（二）身体（二）・G 場面（三）身体（三）

全国大会で観客に興味を持って観て貰える試合ができるためには、両要素ともレベル四を維持しなければなりません。そのレベルを引き上げて先週と今週県下総合選手権大会に出たのですが、光は見えませんでした。

今度の試合は高校生相手ですから県総合選手権よりも通用するプレイが多く出るでしょうが、それもおとな相手の試合で通用したかしなかったをちゃんとわかってプレイするのと、そうでないのではその後の上達に大きな影響を及ぼします。

月曜日はオフ。その後火水木金と四日間の練習で地区新人戦を迎えますが、この四日間の選手たちの表情をつぶさに観察しながら今後の導き方を考えます。

【結果報告】大窄（内踝骨折り八中）浜本（ジャンパーズ二）

地区新人戦の一回戦に臨む選手たちは高校総体同様独特の緊張感に揺さぶられます。三年生が抜けた最初の試合だからです。初戦のハーフタイムに私は次のようなことを選手に話しました。

「新人戦で起用する選手たちは、力を付けて貰って本当に強い相手との試合に使える選手にしなければならぬレベルの者だ。そのためには一秒も時間を無駄にしたいくない。県内レベルはもう卒業だという選手は少しだけ出す。県内レベルにすら達していない選手は、九州大会や全国大会でもし点差が開けば出してやることがあるが、新人戦のように試合を通して勉強して貰わなければならないような試合には出してやる暇がない」

前川は時間が経てば根気をなくす選手なので「修行してこい」という意味でフルタイム出場させました。浜本の出場時間が短いのは、ジャンパーズ二をこれ以上傷めないためです。高崎はもういちど試すために出場時間が長くなりました。

二日目、超嬉しいです。大差で勝てたからではありません。みんないい顔をして試合をしてくれたからです。先日の県総合選手権ではジャトウがコートに居るにもかかわらず周りの選手のプレイはぶざまでした。たぶん「高岡さん・杉野さん・ジャトウが抜けたあとの私たちはどうなるんだろう」という不安が各選手の心の中にとぐるを巻いていたからだろうと思います。

浜本の自滅プレイは目を覆うばかり。影井のアタマは深夜のテレビ放送終了後のテレビ画面状態になる。大窄はケガで出られない。前川は肝心なところで集中力が切れる。それらの不安要素を払拭する手だてが見つかからないまま地区新人戦に突入しました。

ですが、何がきっかけでそうなったのかわかりませんが、蓋を開けてみるとそれらの不安要素がすべて吹っ飛んでそれぞれのいいところばかりがかみ合った試合展開になったのです。狐につままれたようだが起こったのかよくわかりません。

#### 【戦評】

鶴鳴・長崎西・純心・長崎商業の四強は相変わらず他の追隨を許さない。なかでも長崎商業はがりおトメンバーが替わり、しかも一年生主体であるにもかかわらず危なげなく四強維持はアップレ。

純心は坪田・木原がスタメン定着でパウランスがとれ、地区新人戦前の総合選手権でもいい方向に向かっていたが今大会は動きに切れがなかった。本当はこんなものではないだろう

長崎西はかなり強いはずだと思っていたがこれもちぐはぐさが目立ち、力を出し切れなかったようだ。というわけで、結局鶴鳴のぶつちぎりになってしまった。

ジャトウがいなくなり、どのチームにもビッグセンターがない状況の中で、ゼロックスカップ（ジュニアオールスター）で活躍した選手たちがもう一度高校バスケット界でもそれを再現しようと思っ取り組んで欲しい。そうなると今年もおもしろくなる。

文責 山崎 純男

平成十七年十一月 県下新人戦 二位 スタメン 泉谷 前川 高崎 浜本 磯野

#### 【案内文書】

昨年丁度今頃前川が足首を捻挫して戦線離脱しました。

約一ヶ月半の療養を経て復帰したものの、パツとしないので前川はウィンターカップのエントリーから外れて留守部隊に回されました。その後正月休みが明けて再開した新年度の練習（正月招待合宿）では、「長

い休みの間に奮起して身体作りをしてきただろう」という私の期待を裏切って、正月明けの練習に何の用意もしておらず、前川は招待合宿中にエントリーから外されて戦力外通告を受けました。

そうしてエントリーから外れたまま数ヶ月が過ぎましたが、五月の倉敷遠征直前にマネージャーの与那嶺が急に体調不良でキャンセルになったので、出発前夜に前川と高崎を面接して前川をマネージャーとして連れて行くことに決めました(第八章参照)。

ところがこの遠征ではまだ下級生が戦力として使えず、日が重なるにつれてどうしても前川を時間繋ぎとしてでもいいから使わざるを得なくなりました。それを契機に前川は復活してインターハイではスタメンにまでの上あがってきました。

また、高崎は生来の小心者ですからどうしても競り合いに勝つことが出来ず、抜群のシユート力がありながらこれも戦力外通告を受け、今年のインターハイもエントリーから外されました。しかし、高崎をこのまま埋もれさせるのは惜しく、「もう一度試してみるか」と、九月になってからまた出番を与えるようにしました。するとこれがまた復活。

それに、一七〇cm以上の選手がどうしても必要だからという理由だけでベンチに座らせていた磯野が地区新人戦以降戦力として計算できるようになりました。

この三人がここまで計算できるようになったのは重大なことです。が、それとて本当に強いチーム相手ではまだまだ確実とは言えません。前川は今日の練習でまた捻挫しましたし、高崎も先日九州総合選手権ではやはり脆さを暴露してしまいました。

大宥・影井・磯野はケガで療養中です。本当にホンモノならば大事なところでこんなアクシデントやパフォームスタウンは起きません。この大会で一皮剥けて、それぞれがホンモノに一歩近付いてもらいたいと思います。

【結果報告】大宥(内踝骨折り八中) 浜本(ジャンパーズ二) 影井(捻挫り八中) 磯野(初日再捻挫) 負けました。そして、報告が二日遅れました(学会論文発表資料作成のため)。合わせてすみません。

負けましたが、一〇月の地区新人戦や一週間前の九州総合選手権の戦い振り比べて著しく悪かったところはあります。だから、九月のウィンターカップ予選の頃に比べると強くはなっているんです。ただ、小さな事件に翻弄されたり、ホツとした瞬間にミスを冒したりする一面がまだ少しだけ残っているようです。

それと、地区新人戦の成果で少し安心した油断が今回の結果を呼び込んだのかもしれない。が、それも今後大仕事をしなければならぬ要素ではありません。私に何かをやらされるのではなく、自発的に訓練を数ヶ月継続すれば改善されるものだと思います。いずれにしろ、軟弱だった新チームの選手たちが大きく成長していくにはいい勉強になったのではないかと思います。

この試合はスタメンの五人で戦っています。その中で、これまでほとんど起用されなかった上田が六番目で七分間だけ起用されています。このことについて説明します。なぜ上田なのかというと、上田は他の選手より弱点がいくつかありますが、常に戦闘態勢でいるので私の直感で起用しました。

では、上田が日頃の練習で、自分に厳しい態度で臨んでいるかというところではありません。むしろ、苦手なことは誰よりも先にギブアップします。が、訓練と戦いは違います。戦いはこの場をなんとかしてくれることが最優先されます。訓練は学習です。知力・体力・技術の向上を目指し、それに取り組む本人の意志力が重要です。ですから、練習ではとてもまじめで人間性を高く評価されていて試合では戦力として期待できない選手が出てきます。私にとってそれはとてもつらいことです。まじめさや人間性が戦いの場面でも最優先になって欲しいと思います。

#### 【戦評】

長崎西の気力充実が勝負をものにした。この一言に尽きよう。「捕まえられたか？」という場面を凌ぎきった。一方鶴鳴は、これと言ってまずいところはなかった。強いて言えばインサイドブレイの力不足か？

【正月合宿】於 鶴鳴

○一月〇三日〜〇七日 対戦チーム 九州女子・札幌創成・慶誠・神村学園

スクリメージ 二六本 十八勝八敗

コメント

私は新チームを信用していない。だからこの合宿は私としては不安を抱えたままのスタートだった。しかしそれは初日に払拭された。選抜大会で燃焼しきれずに負けた重苦しさを引きずったまま正月休暇に入り、一週間ぶりに会った選手たちの表情にはかげりがなかった。いや、表情だけではない。動きそのものも目を追う毎に軽快になっていった。粘り強くなっていった。ひよっとしたら純国産車作りのタイヤの一本ぐらいはこの合宿でできたのかもしれない。

選手個人にスポットを当ててみると、本来スタメンで出場するはずの大窄（深江中一六二cm二年生）は内踝骨折で九月のウィンターカップ予選から試合に出ていないし、この合宿もメンバー表にすら名前が載っていない。替わりに高崎（夙川学院中一六二cm二年生）が成長してスタメンに名を連ねるようになった。

この合宿ではチームの中で最も背が高い影井（鳥取鹿野中一七七cm一年生）をなんとかスタメン常連に出さないかと思つて、泉谷 前川 高崎 浜本 影井 のスタメンで戦つてみた。しかし、結果的に六番手出てくる磯野（純心中一七二cm一年生）と出場時間は変わらなかった。

影井をなんとか戦力として使いたいと思つたのは、一七七cmの身長ながらスリーポイントが打つてその確率は低くない。それを活かせないかと思つたからである。しかし結局、ここ当分は影井ではなく磯野のスタメンで行かなければならないことがわかつた。影井は学業成績は抜群である。彼女のアタマの良さが試合の局面を読むという力には作用しないので危険でまだ使えないのである。

平成十八年〇一月 九州春季二次予選 四位 スタメン 泉谷 前川 高崎 浜本 磯野

【案内文書】

三日午後から八日午前までは恒例の正月招待合宿。札幌創成・九州女子・熊本慶誠・神村学園・鶴鳴の五校でスクリメージをたくさんやりました。他校は早く来て早く帰つたり、遅く来て遅くまで居たりしますが、ホスト役の鶴鳴は始めから終わりまでズッとやらなければなりません。

この合宿では二つの心配がありました。ひとつは、強いチームとの戦いでコートに送り出せる選手（五分ぐらいしか使えない選手も四〇分フルに使える選手も含めて）が七人しかいないので、初日から最終日まで体力が保つかどうかという心配。二つ目は、高崎の外角シュート・浜本のミドルレンジシュート・泉谷のインサイドプレーを得点の柱とすることを新チームの選手達には伝えてあるもののそれをチーム練習で確認する時間がないままこの合宿に入ったので、スムーズに行くかどうか、またこの攻撃方法の将来性がスクリメージを通して見えてくるかということが心配でした。

その心配はすいぶん割り引きされました。完全にチームが一体化したわけではなく、まだまだ直さなければならぬ問題を抱えた選手たちばかりですが、ウィンターカップで高岡に頼つてばかりいた下級生のプレイと、これまで何度も指導し続けてきた下級生の弱点矯正がなかなか実を結ばなかったことから考えて、おそらく新チームはかなりトーンダウンして動き始めると思つていたのです。

それが「この程度で収まるならばなんとかなる」という滑り出しでした。しかも、終盤失速することもなく、むしろ上向きで合宿を終りました。この合宿で、これまで信頼度が低かつた二年生が「私たち大丈夫みたいよ」と思い、バスケットボールだけでなく生活のすべてにおいて「らしくなろう」と思つてくれればベンツに負けない国産軽四輪が早く出来上がるかも知れません。

自覚といえば、十一日と十二日に二日間岩手県盛岡市在住の新沼先生（二八歳）が見学に来られました。今は養護学校勤務だからチームは持てないが、将来チームが持てる学校に転勤になった時のためにしっかり

勉強をしておきたいからだそうです。自費です。約八万円かかります。そうまでして鶴鳴バスケットから何かを得ようとしている人がいます。選手も私も、このような人たちを失望させない自覚を持たなければなりません。

【結果報告】大窄（内踝骨折り八中）

初日

第四章熊本インターハイの報告書で、敗戦のシヨックが癒えずに引きずっている試合が十九試合あると述べましたが、今回新たに過去最大級のシヨックを受けた試合がまたひとつ加わりました。

シヨックの理由は、コート上の選手が浮き足だったままで、どんなことばをかけてもどんな手を打つてもそこから抜け出せなかったからです。なぜ人は、思い通りにならない時に浮き足立つのか、それはほとんどの場合、自分の弱さ・脆さ・愚かさを克服する努力を日頃充分やっていないと自分自身が知っているからです。そういう自分に怯えるのです。

では彼女らは自分の弱さ・脆さ・愚かさを克服する努力をしていなかったのでしょうか？彼女らには過去の先輩たちに比べて危ない一面がありました。昨年一〇月と十一月の地区新人戦と九州総合選手権では、「今年も大丈夫なんだ」という仕事をしたのです。こんな仕事は周りでいくら騒いでもできるものではありません。本人が「ヤル！」と思わなければできない仕事なのです。それなのにこんな結果に終わってしまった。それが…それが…無念でなりません。

明日の結果如何で二位になる可能性や三つどもえで優勝する可能性もあります。ですから、明日の結果がどうなってもこのチームの指導をするのを投げ出したりヤケになつたりはしません。

二日目

三つどもえどころか、鶴鳴は昨日よりもさらにパフォーマンスダウン。なんとかして助け起こそうとしましたが息を吹き返しませんでした。これで平成十七年度の公式試合はすべて終了です。次の公式戦は四月中旬の県下高校春季選手権です。へこたれませんががんばります。

【戦評】

決勝リーグ純心戦

先手を取った方が伸び伸びプレイし、後手に回った方はなかなかペースを掴めない。新人戦でよく見かけられる試合展開だった。これが、九州春季選手権を経て春休み合宿を経験するとたくましくなってくるのだろ。

決勝リーグ長崎西戦

長崎西は常時軽快で決断が早かった。鶴鳴は足に鉛のおもりを付けたように重く、躊躇した挙げ句決断したプレイがごとく自滅プレイになった。これでは何をやっても勝負にはならないだろう。 文責 山崎

【腱板断裂】

二月七日のブログより

「先生入院するんですって？」と、いろんな人から聞かれます。それはもう昨年の九月には決まっていたことで、一〇年以上前に手術しなければならなかったのに延び延びになっていた右肩腱板断裂の修復手術です。大病院の医師の都合と私のわがままな都合を調整していたら二月下旬しかありませんでした。最初は鏡視下手術で約一週間の入院予定だったのですが、造影検査とMRI検査の結果、損傷範囲が広くて大腿部から腱を移植しなければならぬので鏡視下手術では不可能になり、三週間に延びたのです。が、練習と職務への支障は最小限に食い止めました。

二月十三日のブログより

私事の報告をします。今日一〇時に入院し、十二時十三分に退院しました。要するに手術中止になったのです。中止になった理由は、八日に行なった術前検査の結果を見て麻酔科の医師がNGを出したからです。

私の心電図は二〇年前からST上昇で、負荷心電図も二四時間心電図も撮ったことがあるのですが何も異常は見られず、当時の医師のコメントは「スポーツ心臓によくあるケースですよ」でした。しかし、一九九二年（平成四年）に研究者のブルガダが報告して以来、循環器科の医師の間でブルガダ症候群という循環器系の疾患が注目されはじめ、私のはそれではないかと、一昨年十一月に左膝鏡視下手術をした時の術前検査で指摘されました。

そして今回も大病院の循環器科の医師に同じ事を指摘されました。循環器科の医師のコメントは「グレイです。が、黒に近いグレイかシロに近いグレイかは詳しい検査をしなければわかりません。今回の手術には影響はないでしょうがいずれ詳しい検査をした方がいいでしょう」でした。しかし、麻酔科の医師のコメントは「シロでないかぎり麻酔はできない」なのです。循環器の精査も肩の手術もしません。コーチ業と仕事に専念します。お騒がせしました。

#### 【アキレス腱不全断裂】

二月十一日のブログより

いろんな事があって一時中断していた五千歩走を久しぶりにやりました。影井は捻挫が回復して十一月二十九日から参加しましたが記録が伸びません。そして一月一日に記録がガクンと落ちたので聞きました。

「お前、どした？」

「走り始めてすぐ足が重くなり太ももがパンパンになります」

「ウーン…単なる練習不足ではないな。きつと貧血再発だ。検査しよう」

検査の結果はヘモグロビン八・六、血清鉄二九。運動禁止どころか病気のレベルです。一月十九日からチーム練習禁止にしました。軽い個人練習は許可したのですが、ハイポスト近辺からシュートフェイクしてドライブの練習（ほんの軽い動きですよ）中にほんの少し力を入れてキックした途端、踵でグキツという音がしたそうです。専門医の診察の結果（エコー）は「アキレス腱不全断裂」でした。というわけで彼女は三ヶ月間練習していません

#### 【関東遠征】於 ジャパンエナジー

○三月二七日～三〇日 対戦チーム

札幌創成・旭川富士女子・倉敷翠松・市立柏・福井商業  
東京成徳・昭和学院・京都明徳・松戸成徳・土浦日大  
スクリメージ 十四本 六勝八敗

#### 【四国遠征】於 徳島城北

○三月三一日～〇四日 対戦チーム

城北・園田学園・香川英明・松江東・新居浜商業・福井商業  
神村学園・倉敷翠松・夙川学院  
スクリメージ 二三本 十六勝七敗

#### コメント（関東遠征四国遠征総評）

四月三日のブログより

今日の午前午後と明日の午前中で長かった関東～四国遠征が終わります。前川・浜本・松本（新入生佐世保日野）・松木（新入生式見）・川口（新入生若屋）の特訓を目標に三月下旬東京に向けて発ちましたが、川口はやはり高校生のスピードについていけず、個人練習止まりでした。松木はちょっと気弱なところがあり、私から殺されんばかりの剣幕でしかられ続けながら懸命に頑張っていました。徳島に来て右足を痛めて（たぶん有痛性外径骨）四月二日から戦線離脱となりました。

前川は徳島での初日に足首を捻挫してその日の午後は試合ができませんでしたが、二日目からはなんとか試合に出ています。浜本が技を二つ覚え、それを試合中にもなんとか使えるようになりました。これは大収穫です。それと、毎日スタメンでフルタイム出場の松本はたぶんボロボロになっていると思います。必死で

踏ん張っています。これも大収穫です。新入生の中では里と川畑が時々使われます。その他の新入生はなかなか出番が回ってきませんが顔つきや目つきからこどもっぽさが消滅しました。

遠征の強化試合は双方のチームの監督の思惑がありますから、白星黒星がそのままチーム力を表しているとは言えませんが、私の感想を述べます。三月末～四月初頭の遠征は、前川・浜本の特訓が目標でした。加えて、新入生の川口・松本・松木を即戦力として急造するのも狙いとなりました。

高崎・泉谷のスタメン組と大宍・影井のバックアップ組は留守部隊で置いてきました。結果として、川口を今年の戦力に加えるのは無理だとわかりました。一方、松本と松木は戦力として使えるとわかりました。三月二十九日の聖徳戦から前川・浜本・磯野・松本・松木をスタメンとして運用することにしました。

#### 【後日談（一）】

三月下旬の遠征には新三年になる選手は前川だけしか連れて行っていない。ケガや病気ではなく、ペナルティで連れて行かなかったのだ。回顧録第一章の「未つ子軍団」の項で、平成×年に保護者に警告した文書を平成×年にも出したということ述べているが、実はそれはこの年の出来事のことである。私は当事者たちをペナルティで長崎に残して行き、さらに次の春季選手権でもこの選手たちはエントリから外した。ずっと前、「鶴鳴でもそんなトラブルがあるんですか。安心しました」と、あるコーチから言われたことがある。自分のチームはトラブルばかりで選手の躰にいつも苦労しているが、鶴鳴ではそんなことは皆無だろうと思われていたのだ。そんなことはない、鶴鳴も毎年がそれとの戦いである。

この出来事を引き金に、鶴鳴はほとんど下降線を辿っていくことになる。実は、三年前にその予兆はあった。中学の卒業式が終わって春休みに入ったある日、鶴鳴の練習に参加したY選手はパンパンに太って眉は公家の女性みたいになるつるになつていた。明らかに、中学のシーズンが終わった八月以降精神的にも肉体的にも鍛錬しないまま高校入学を迎えたのである。

しかしY選手側に立って事情を考えてみれば、本人は鶴鳴入学希望ではなかったのに周囲から無理やり鶴鳴を進められ、しぶしぶ入学してきたかもしれないのである。鶴鳴バスケットに入ってくる選手はすべてがしっかりした目標を持っているとは限らない。なんとなく鶴鳴バスケットに入ってくる選手、あこがれだけで鶴鳴バスケットに入ってくる選手、いやいやながら鶴鳴バスケットに入ってくる選手は毎年居る。しかしそれれもれつきとした鶴鳴のバスケット部員である。引き受けた以上どの選手もしっかり教育する義務が私にはある。

#### 【後日談（二）】

四月一日、徳島合宿の初日に松木が有痛性外径骨で無理をさせられなくなったので英明戦から野村を起用した。このメンバーで四月の春季選手権を戦うつもりだったが、直前に松木が復帰したので野村を下げて松木を起用した。高崎・泉谷・大宍・影井がいなくてもかわらず、しかも新入生二人をスタメンに使って春季選手権（四月二四日）は優勝した。それには三つの要因がある。一つ目は浜本が二月から練習し始めた技を試合で使えるようになったこと。二つ目は磯野のすばらしい仕事（これは五月の連休とバルーンカップでも証明された）。三つ目は松木と松本の新入生が骨を軋ませながら頑張ったことである。

平成十八年〇四月 県下春季選手権 優勝 スタメン 前川 浜本 磯野 松本 松木

#### 【案内文書】

短大・高校の授業時間数増に加えて県バスケットボール協会の組織再構築にも携わらなければならなかった。今年にはメツチャメチャ忙しく、息つく暇がありません。でも、チーム強化は最優先事業ですから絶対に手を抜けません。すると寝る時間を削る以外にこれらの仕事を捌く方法はありません。フーツ。

さて、今回の試合には特定の個人の特訓を行うという目的をもって臨みます。三年生では前川だけ、二年生では浜本だけ、一年生では川畑・里・松本・川口・森の五人をこの試合で特訓します。もちろん他の選手

をまつたく出場させないわけではなく、また特訓指定の選手にも優先順位があります。

一年生では松木を特訓指定の上位に加えたかったです、春休み遠征中に有痛性外径骨で途中脱落したので傷みが引いてからの再スタートということになります。非常に残念です。来年の今頃の戦線離脱というのは大して苦になりませんが、スタート時点での脱落は一日分の利子が高くつくので半端な損害ではないのです。

春休み遠征中に更新したホームページでも述べましたが、浜本が試合で使える技を二つ覚えたのは大きいです。この一年間の浜本は気負いすぎて自滅し、ちょっとした事件でアタマが真っ白になるというパターンの繰り返しでしたが、ようやくそれを抜け出させてやれるかもしれないと思うとワクワクします。

前川をポイントガードにコンバートしてから約三ヶ月になります。技の切れや身のこなしでは他の選手を一步リードしています。過去二年間、期待しては裏切られ期待しては裏切られという繰り返しでしたが、もう一度彼女の素質を引き出すことに挑戦しようと思います。

一年生の特訓対象は五人いますが、それだけ優秀な選手が集まったのかというとそうではありません。それぞれがそこそこやるのですが、強烈な個性を持った選手が一人もいません。それで、こじんまりとまとめた選手にならないように最初からムチを入れようと思っっているわけです。

ともあれ、チーム全員で二九人の大所帯になり、みんなどこかへ出かけようとするれば私のバスでは一名余る人数になってしまいました。そこに何らかの魅力がなければ人は集まってはきません。何がどう作用したのかわかりませんが、自画自賛かもしれませんがそう考えて邁進したいと思います。

【結果報告】泉谷・大宍・高崎・森・峰・林田（エントリー除外）

初日

毎年のですが、この大会はみんな平等に出場させるというわけにはいきません。秋までに戦力として使える下級生をこの大会で見極めなければなりません。一年生はケガをしている吉谷とマネージャーの森、それと最近入部した樫本と当麻以外は全員エントリーしていますが、春休み 通常練習 今大会という過程の中でこの九人のランキングにも少し変動がありました。

初日を終えた時点では森が急浮上。彼女の目付きとプレイぶりからはつきりと「バスケットの理解と自分の弱点の矯正」に挑戦する態度が私には見えました。これからそれがホンモノかどうか注意して見ていこうと思います。

二日目

森が仕事をキチンとできるほど二日目の相手は甘くありませんでした。勝負の世界ではまじめさや熱心さよりも強引さや体力の方が役に立つ場合がしばしばあります。でもくさってはいけません。最終的にはまじめさや熱心さの方が勝るはずですから。森に限らず一年生はこれから何度もこういう目に遭います。でも、それはホンモノになりたい者は必ず昇らなければならない階段なのです。ガンバレ一年生！

最終日

前川・浜本・松本・川口・川畑・里の公式戦での特訓をテーマとして臨んだ大会でしたが、はたしてその収支決算は…

前川は出直し。

浜本は八〇点（特訓した個人技を試合で使えるようにはなったが、試合の様相を見る目はまだまだ）

松本・松木はよく持ち堪えました。この経験は大きいです。

磯野は獅子奮迅の働きでした。サラリーマン世界ならば係長を跳び越して課長昇進です。

川口・川畑・里には最終日に出番を与えてやるには荷が重すぎました。

五月の連休遠征から泉谷・高崎・大宍・影井が加わってエンジン全開です。

【戦評】

決勝戦は両者とも有利な展開を維持できず自滅。決勝の試合にしては内容が乏しかった。高校総体まであ



と一ヶ月半。両者とも奮起を望む。

文責 山崎 純男

【倉敷遠征】於 倉敷市体育館

○五月○三日～○五日 対戦チーム 倉敷翠松・徳島城北・慶進・福井商業・慶誠・夙川学院  
スクリメージ 十三本 九勝四敗

【福岡遠征】於 九州女子高校

○五月○七日のみ 対戦チーム 九州女子・神村学園  
スクリメージ 七本 四勝三敗

【第一回バルーンカップ】於 佐賀北高校体育館 二位

○五月十三日～十四日 対戦チーム 佐賀東（一〇八対五二）熊本商（六五対五八）  
国府（五八対五六）小林（六六体七九）

【招待合宿】於 鶴鳴

○五月十九日～二〇日 対戦チーム 神村学園  
スクリメージ 七本 六勝一敗

コメント（倉敷遠征・福岡遠征・バルーンカップ・招待合宿総評）

連休遠征から高崎・泉谷・大窄を復帰させた。影井も復帰させたが五月五日の夙川戦でまたアキレス腱を傷めて戦列から離れた。連休遠征のスタメンは前川・高崎・泉谷・浜本・磯野である。このメンバーはよく動くし強い。しかし、高崎はまだ貧血治療中なのでほんの少しだけしか試合には出さなかった。

五月十三日と十四日の佐賀バルーンカップでは決勝で小林に負けたが、前半終了間際に泉谷が捻挫して退場したので仕方がない。浜本の第三の技をこの試合で試させたが、使うタイミングがまだ自分のものになっていないようだ。

## 二 再びACL

平成十八年○六月 県下高校総体 四位 スタメン 前川 高崎 泉谷 浜本 磯野

【案内文書】

五月八日が高校総体エントリーの締め切り日で十六日が組合せ抽選会でした。監督一・コーチ一・マネージャー一・選手十二の中で選手七名とコーチ・マネージャー合わせて九名が三年生です。なぜ三年生が多いのかという説明は、チームを作る改訂版第二章「人を動かす 人を育てる」コーチは優しさと非情さの両方を持って（一五六頁）」に述べています。

四月の春季選手権は、前川・浜本・磯野・野村・に新入生の松本・松木を加えた六だけで準決勝と決勝を戦いました。本当に苦しい戦いでしたがみんな骨を軋ませながら踏ん張ってくれました。その後、泉谷・高崎・大窄・影井が復帰し、「さあ、どこからでもかかって来い」と意気込んで五月の連休の倉敷・福岡遠征に臨みました。が、倉敷遠征の最終日に影井がまた左足アキレス腱を傷めたので急遽川口を補充し、前述のエントリーメンバーが決まりました。

さて、遠征の成果について報告します。連休の倉敷遠征と福岡遠征では、春休み遠征中に技を二つ覚えた浜本は強い相手になると浮いたり沈んだりで、もう怖いものなしというわけにはいきませんでした。しかし、そのおかげで三つ目の技を身につける必要があることがわかり、ただいま特訓中です。難しい技ではないので使うタイミングさえ会得すれば総体までになんなく使えるようになると思います。

泉谷と高崎がスタメンに復帰したことは前川の負担をずいぶん軽くしてくれています。が、この二人も遠征初日の動きに比べれば後半はパフォーマンスが低下し、充分機能したとは言えませんでした。二人とも実戦から遠ざかっていたので仕方がありません。特に高崎はまだ貧血が完治していない状態での遠征でしたの

で無理はさせませんでした。二人とも休養を取り入れながら徐々にペースを上げ、浜本の第三の技の特訓と併せて総体までにはピタツとかみ合うようにしたいと思います。

磯野の春季選権での働きぶりはやはりホンモノでした。常に安定した仕事をしてくれています。大倉は昨年九月十六日の左足首骨折以来約七ヶ月半ぶりの復帰なので連休の遠征では本来の力をまだ発揮できませんでしたがディフェンス面ではキチツと仕事をしてくれました。松本・松木は、上級生が復帰してくれたので連休の遠征では少し肩の荷を降ろして伸び伸びやってくれるのかなと思っていましたでしたが気分はスタメンです。頼もしいです。まだまだ若さを露呈する場面がしばしばありますが、前川・泉谷が着かれた時の繋ぎには非常に重要な存在です。

特に、春休みのケガで松本に水を開けられていた松木が松本に並ぶ位置まで追いついてきました。あとは影井の脱落で出番が回ってきた川口に自覚が芽生えれば完璧に仕上がります。

【結果報告】浜本（長崎西戦でACL断裂）

初日

お気付きだと思えますが、背番号十四は松木ではなく上田に替わっています。松木は六月一日の練習中に捻挫してしまいました。翌日まで様子を見ましたが無理させない方がよいと判断し、急遽選手変更届けを出しました。松木には気の毒ですが「無事これ名馬」。どんなに卓越した能力を持っている選手でもケガ・病氣・五反則と無縁にならないければ名選手とは言わないということを味わってもらい、その屈辱を次回は倍にして返してもらいたいと思います。

対戦相手の翔南というのは島原南のことです。翔南のコーチの李垣嬋（り かいえ）女史は韓国出身で桜花学園卒です。シャンゾンの河選手と同級生です。日本で教師になりたくて長崎県の教員採用試験に挑戦中です。選手としてもまだ現役でストレッチチームに入って長崎の国体選手としてもプレイをしてくれます。

二日目

選手の交替には気を使います。交替は、決勝リーグのことを考えてすべて私が決めます。本人が「調子いいからもう少しやりたいなあ」と思っているもサツとベンチに下げることがあるし、結構がんばっているのにもまだプレイさせ続けることもあります。すべてその先のことを考えてのことです。

三日目

決勝リーグ二連敗で九州大会の出場権もインターハイの出場権も失いました。今年のチームは小さな事件に翻弄されるし、頑張ったあとは放心する選手たちが多いので、試合でも練習でも主導権の移り変わりや試合の流れの変化の前兆にはこのほか気を使ってやってきました。が、決勝リーグでは翻弄と放心を覆い隠すことができませんでした。たぶん、「これとこれが（大会中の出来事ではなく、日常の練習での出来事も含めて）原因だろうな」ということは分かっています。それも承知で「俺の手でなんとかしてやる」と思っています。

最終日

昨日膝をケガした浜本はこの一年間使えないので、浜本抜きで戦う九月のウィンターカップ予選のことを考えながら戦いました。公式試合というのは、いくらディフェンスをがんばっても点が取れなければ勝てません。特にシュート屋がいなければダメです。それを高崎に担ってもらおうと思っフルタイム出場させました。

【戦評】

鶴鳴対純心

純心はいい仕上がりで今大会を迎えたようだ。純心はプレイに迷いや躊躇がないし、みんな心身ともに充実していた。一方鶴鳴は、主導権を取れそうな場面が何回も訪れたがそれを悉くものにできなかった。

鶴鳴対長崎西

長崎西は主砲兼頭が昨日の清峰戦でヒザをケガした。鶴鳴戦の試合前の練習ではみんなと一緒に練習して

いたが試合には出ていない。一方鶴鳴もこの試合の第一ピリオドで浜本がヒザをケガした。おそらく前十字靭帯損傷だろう。

両チームこうして傷を負いながらも長崎西は勝利をものにし、鶴鳴は崩れたりリズムを取り戻すことができなかつた。高校総体のコートには魔物が潜む。その魔物に潰された方が負けだ。

鶴鳴対長崎商業

長崎商業は川上をケガで欠き、鶴鳴は浜本をケガで欠いての試合。しかも、双方どんなにがんばっても九州大会にもインターハイにも出られない。それでも多くの一般生が応援に駆けつけてくれているので精一杯のファイトをしなければならぬ。

辛くても、氣力が萎えても、観る人に退屈させないのが競技者の使命である。そのことを忘れずに双方の選手が戦ったのなら、次回はきつと神様が双方の選手にご褒美をくれるだろう。 文責 山崎 純男

#### 【ACL】

私は昭和五二年に鶴鳴に移籍して平成二五年にリタイアするまでの三六年間で十四人ものACL損傷選手を出している。誰よりもスポーツ医学を勉強していると自負しているののである。最初の事故は移籍後間もなく一年が過ぎようとしていた昭和三年の二月に起きた。波多江真奈美が五対五の攻撃の練習中に、右サイドでガードからのパスをミートして受けた瞬間に私の目の前で着地時に膝崩れを起こして呻きながら倒れた。この時私は、大きなケガをしたようだとはわかったがACLを切ったらしいを予測する知識はまだ持っていなかった。

以来、ACL損傷の瞬間を目撃した例がたくさんあるが、その大半が非接触の自損事故である。前述の浜本の場合もそうだった。長崎西戦で右ベースライン沿いのドライブインを試みたが、相手に阻まれたのでバックワードドリブルで体勢を立て直そうとして左足をキックした瞬間に膝崩れを起こして倒れた。この時は私もずいぶん勉強しており、「ACLをやった。一年はダメだな」とすぐ思った。

しかし私は、選手がケガをした瞬間にバタバタ動かない。数十秒観察してからマネージャーや周囲の者に指示を出す。「まずコート外の邪魔にならない場所に移せ。そしてすぐ冷やせ。動かすなよ」そして、本人が落ち着いてから問診や触診をしてその後の処置を考える。

試合中にケガ人が出るとみんながバタバタとその選手の周りに集まり、すぐ抱きかかえてベンチ横に運ぶケースが多いが、ケガ人は本能的に損傷部位をかばい、痛みが最も和らぐ姿勢を取る。それを無理矢理抱きかかえたりすると却って痛みが増したり苦しんだりする場合が多いのだ。だから最初は本人が取っている姿勢をできるだけ変えずに邪魔にならない場所に運び、まずは落ち着かせることが重要だと私は思う。

私の場合、さらに選手がケガした状況や本人の苦しみの程度からして最悪の場合を想定し、彼女不在の期間のチームの持つて生き方をシミュレーションする。ケガの程度を心配するよりもこうして最悪の場合のシナリオを用意しておくのとケガの程度と実態が分かった時にも動揺しなくて済む。

六月六日の午後五時。私は長崎西の兼頭と鶴鳴の浜本を大学病院に連れて行き、整形外科の米倉医師に診てもらった。私は二人ともACL（前十字靭帯）を傷めていると予想していた。自チームの選手ではないのになぜ兼頭も連れて行ったのかというと、この年私は少年女子国体チームの監督をしていて、兼頭は一〇月に行われる兵庫国体の主力であり、また、三年生なので兵庫国体に出られるか否かで兼頭の卒業後の進路が大きく左右されるからだった。

病院に連れて行く前に、尾崎監督と兼頭を前にして私は、たぶん二人とも「国体選手から外されるのではないか」と心配しているだろうと思いい「どんなことがあっても外しはしないからな」と伝えた。そして、病院に連れて行くことも、診断結果に基づいての今後の対応についても私に一任するよう、尾崎監督からも兼頭の両親からも承諾を取った。浜本の両親には、ケガした直後にACLを傷めたことと一年間はプレイできないということも伝えてある。これも「山崎先生に一任します」だった。

米倉医師の診断ではやはり二人ともACL損傷だった。診察には兼頭の母親も立ち会わせた。医師の診察の様子を見させ、診断結果のコメントを聞かせるためであった。診断が下ったところで私は、「浜本はまだ二年生で来年一年間高校でプレイするチャンスはあるのです。手術してもいいですが、兼頭は一〇月の国体が本人の将来に影響するのでそれまでは保存療法で、国体が終わったあと、もっとも学業に支障のない冬休みになってから手術してください」とお願いした。兼頭の母親も本人もそれを承諾した。というよりもそれを願っていた。

夜、私は兼頭の家に膝関節の模型を持ってACL損傷の説明に行った。仕事の都合で診察には立ち会えなかった父親も含めてもう一度わかりやすく説明するためだった。説明している途中に兼頭の立ち姿が気になって調べた。すると兼頭の膝関節は真っ直ぐ立った時に後方にカクッとくの字になる(過伸展)。兼頭の場合には他の関節を調べなかったがこのような選手は手首や肘の関節も曲がり過ぎたり、肩関節が緩すぎたりする場合が多い。これを関節過柔軟性といい、普通の選手より関節のケガを起こしやすい。

#### 山崎純男のブログより(六月八日)

六月七日は高校総体の代休で学校は休み。チームもオフにしました。六月八日から練習再開。朝練の時に松本が「先生、春季選手権の頃からスネの骨が痛いんですが」と申し出てきました。高校総体が終わるまでは心配かけたくないから申告しなかったのでしょうか。歩きも走りも足首の内旋が強い選手なのでどこかを傷めるのではないかと思っていました。おそらく両側脛骨上部の疲労骨折だと思えます。痛い動作は絶対にさせないで、約一ヶ月半はチーム練習から外さなければなりません。疲労骨折は安静以外に方法はありません。

こうして、今朝の朝練から再スタートはしましたが、主砲の浜本、足関節捻挫の完治していない泉谷、アキレス腱傷害でリハビリ中の影井、この夏一気に上級生を抜き去ってもらった松本と松木(総体直前に捻挫)など、主力がいまません。加えてこの四月からずっと安定した力を発揮してチームを支えてきた磯野が決勝リーグの純心戦を境に急に不調になりました。戦後処理は、上記の選手たちの心身のケアとバツクアップ選手の育成から始めなければなりません。

#### 山崎純男のブログより(六月十一日)

浜本の手術は七月十一日(火)と決まりました。松本と松木はまだプレイできませんが、九月のウィンターカップ予選に向けて高崎・松本・松木をシュート屋として再構築をするという方針を全員に伝えて練習を進めています。これは、高崎・松本・松木が他の選手よりシュート力があるという意味ではなく、この三人をシュート屋として仕立て、他の選手がそれぞれの個性を活かしてそれぞれの持ち場を受け持てば組織としての力が発揮できるという意味です。

### 三 兵庫国体

#### 【山口遠征】於 光市

○七月二日～二三日 対戦チーム 山口選抜・福岡選抜・倉敷翠松・熊本選抜

スクリメージ 十二本 八勝四敗

#### コメント

インターハイ直前の国体チーム合宿なので長崎西単独で試合をする場面を数回取り入れた。混成チームとしては、機動力優先の選手構成やセンター西島を起用した構成などいろいろ試した。この合宿では、西島がセンターとして充分使えることが分かり、西島を起用した戦術を描いて選手たちに説明した。それを実際に試すのは次回(八月十三日～十五日)の合宿以降になるだろうが、今年は本国体ストレート出場なので西島

を鍛え上げるには充分時間がある。春には西島はベンチで九州大会優勝を成し遂げたのだから西島が機能するようになれば本国体では上位入賞が期待できる。

#### 【後日談】

私は長崎少年女子国体チームの監督であるが選手は鶴鳴から一人も選んでいない。アシスタントコーチとして長崎西の尾崎先生と純心の大久保先生、選手は川上（長西 一六五cm）・兼頭（長西 一六八cm）・中山（長西 一七〇cm）・笹嶋（長西 一五六cm）・西島（長西 一七九cm）・藤山（長西 一六五cm）・平川（純心 一六二cm）・小川（純心 一六一cm）・西平（純心 一七四cm）・高田（純心 一六〇cm）・坪田（純心 一六五cm）・松田（長商 一五八cm）という構成である。

私は年度当初に、もう国体の監督からは降りると申し出ていたが常任理事会で続投を命じられ、やむなく引き受けることにした。降りることを申し出たのは情熱が薄れたからではなく年齢を考えてのことである。バスケットボールそのものに携わるのは、私的には何歳になっても身体が動かなくなるまでやるつもりであるが、六五歳を過ぎてなお国体の監督をするのは、若いコーチの台頭を抑え込むことになると思ったのだ。

県や協会の幹部が私になんとかしてくれと思う気持ちは分かる。確かに、若いコーチが国体の一回戦で負けたコマを私が預ければ二回戦までぐらい持つて行けるかも知れない。しかし、長い目で見た時にそれが果たしてバスケットボール界の発展に繋がるかという疑問なのだ。私は引き受けるに当たって「今年限りだぞ」と強化委員長に念を押しした。

#### 【山口遠征】於 湯田温泉

○八月十三日～十五日 対戦チーム 山口選抜・大分選抜・佐賀選抜・奈良選抜・島根選抜

宮崎選抜・熊本選抜・愛媛選抜・鹿児島選抜

スクリメージ 十四本 一〇勝四敗

#### コメント

七月末の遠征では「西島をスタートで使える」と言ったが、今回「もう少し時間がかかる」に変わった。いろんな組合せを試したが、平川・小川・川上・中山・西平のスタメンが、サイズは小さくなるが機動力が発揮できるとわかった。前回はインターハイ直前だったのでチームとしても個人に対しても厳しい注文は付かなかったが、今回は精神面とプレイ面の両面から厳しい注文を付けた。各選手がそのことを充分意識して臨んだ結果が最終戦で実を結んだ。どの試合でもこのような戦いをしてくれればなかなか負けない。

#### 余談

純心の小川は、前にも述べたが小学生の頃はバスケットもやっていたが空手もやっており、空手では全国小学生大会で三位になったこともある。そこで私は、山口選抜との試合の時に小川を呼び寄せ「次に交替する時は審判に招き入れられたら空手式に拳を握って大きく手を広げ、ウーッスと大きな声で挨拶してコートに入れ。それをやったら千円やる」と言った。

そしてその時が来た。審判がオフィシャルにファウルを知らせてその手続きが終わり、「どうぞ」と言っ  
て小川を手招きしたら、センターラインの外で仁王立ちになって待っていた小川は「ウーッス」と言っ  
てコートに入った。その瞬間、ビックリして山口選抜の渡辺先生がベンチからずり落ちた。試合終了後私はすぐ  
小川に千円あげた。

平成十八年〇九月 ウインターカップ予選 四位 スタメン 前川 高崎 泉谷 大窄 磯野

#### 【案内文書】

六月六日に負けてから約三ヶ月、九州大会にも出ず、インターハイにも出ず、九州国体もなく（府県対抗  
なのでストーリート出場）、ただひたすら練習に明け暮れました（国体チームは二回遠征しているが、鶴鳴

からは一人も選出していない)。何年ぶりでしょう。夏、遠征もせず公式試合にも出ず、ただただ練習に明け暮れたのは。

公式戦に出られないというのはとても辛いです。今年はそれに加えて札幌創成高校の監督就任四年目。それ以前はジャパンエナジーのアシスタントコーチでした。その当時お世話になったので恩返しにインターハイのあとそのまま札幌遠征をする計画を立てたのです。「札幌の町を長崎ナンバーのバスで走れば札幌の人たち驚くだろうなあ」などと思いがつたことを考えて…。

それが、インターハイに出られなくなったのでボツになってしまいました。三上先生すみませんでした。でも、近いうちに必ずクレインズバスで札幌遠征は果たします。必ず！

ともあれ、遂にその時がやってきました。あれから三ヶ月、万全の態勢が整ったとは言えません。影井はアキレス腱傷害がまだ治らないのに加えて五月の連休遠征中に傷めた大腿四頭筋のケガが治らず、今回もエントリーしていません。

泉谷はエントリーしていますが五月の佐賀バルーンカップ決勝戦で捻挫した足首の回復が思わしくなく、約二ヶ月チーム練習から遠ざかったままです。四月の春季選手権では骨を軋ませながら踏ん張ってくれた一年生の松本と松木はこの夏、ほんとうに強いチームと戦うことの厳しさの洗礼を受け、停滞状態がずっと続いています。

でも、そんなことは充分休養を与えようが死ぬほどハードなトレーニングをしようが、起こる時は起こります。そのようなことにはこれまでその都度すみやかに対処してきました。浜本のACL損傷直後からはシート屋としての高崎をさらに追い込みましたし、チームの柱である前川は毎日が生き地獄(精神的に)です。どんなことが起きようが「その時」を指してこの三ヶ月やってきました。やり残したことはありません。

あとは神様が判定を下してくれるでしょう。「お前たちよくやった」と言ってお褒美をくださるかもしれないし、「お前たちにはまだ勝たせるわけにはいかない」とお仕置きをされるかもしれないし、それは神様にしかわかりません。行つてきます。

【結果報告】 浜本(入院)

初日

長松のDNP(出場時間なし)は最近体調が悪くて二日前から学校を休んでいるからです。川口のDNPは日頃の自己チェックに対する甘さへのペナルティです。森(由)のDNPは第一ピリオドで高崎と交替させようと思い、「リキー」と呼んだのですが反応が遅かったからです。県総体ではサービスマンでコートに送り出す場合がありますがそれ以外の試合では修行をさせるか仕事をしてもらう以外の目的でコートに送り出すことはありません。試合は戦場です。エントリーされた選手は誰もが臨戦態勢でいなければなりません。

日頃の選手たちの一挙一動をチェックしている私の目に映る臨戦態勢の 1と 2の選手浜本と吉谷です。二人ともACL損傷手術後のリハビリ中です。吉谷のケガは中学時代のものですからリハビリはほぼ終了です。試合に出せます。浜本のリハビリも進捗状況が予想より早いです。ケガをして初めて「無事これ名馬」の意味がよく分かった二人だと思えますが、それが却って人間的な成長の原動力になっていると思います。

二日目

初日の試合終了後からずっと考え続けていましたが、二日目のスタメンは前川・高崎・泉谷・大窪・磯野で行くことを決め、選手にはその夜電話で通知しました。泉谷は五月のケガをずっと引きずっていますが、松本よりも二年長く人間をやっています。ケガの後遺症のハンディを差し引いても人間として生きた二年の差が絶対プラスに出ると判断しました。

その判断に間違いはありませんでした。用兵でも策戦でも「しまった」という場面は一度もありませんで

した。でも神様の判定は「勝たせるわけにはいかん」でした。真摯に受け止めます。

#### 【戦評】

長崎西戦（六七対六三）

双方コチコチのスタート。なかなか点が入らない。四分過ぎからようやく試合の流れがスムーズになり、双方一歩も譲らないまま前半終了。前半はなかなか内容の濃い試合だった。

後半開始直後、鶴鳴のちよつした安易なプレイから長崎西が三連続ゴール。しかし、その後鶴鳴も踏ん張り、また見応えのある攻防が続く。

緊迫した状態が続く中で第四ピリオドに鶴鳴の前川がパスカットからレイアップを決め、後半開始早々の借金を返すきっかけを作って鶴鳴は息を吹き返す。試合終了間際、六四対六三で長崎西最後の攻撃となる笹嶋のドライブに対して鶴鳴はファウル。バスケットカウント。残り時間からして鶴鳴は一回しか攻撃できない。一回の攻撃で四点は取れない。試合は終わった。

文責 山崎 純男

平成十八年一〇月 兵庫国体 三回戦 スタメン 川上西 小川西 平川純 西平純 笹島西

#### 【案内文書】

スタート時点では母体チームの力をそのまま活かし、ツープラトンで行くつもりでした。しかし、強化練習や遠征を重ねるうちにそれでは本当の力は発揮できないことがわかりました。さまざまな用兵を試みるうちに、八月に入ってからやはりゼロックスカップ優勝メンバーを中心とした機動力を有効に使うのが最適という結論に達しました。なかでも、小学生時代に空手の全国大会で三位になった小川をしばしばインサイドで起用するのは非常に有効だとわかりました。

それまで、西島（長崎西 一七九cm）が急成長してきたので他県にサイズで劣らないチームを作ろうとして執拗に西島を使うことにこだわりましたが、全国の強豪相手では西島が急成長したとはいえ、西島に勝負を託すのは時間不足です。

という経過を辿り、小学生時代から全国大会を経験し、修羅場をかくぐつてきている小兵軍団で行くことにしたのです。さりとて、小兵軍団だけで戦うのにも限度があります。したがって、小兵軍団で戦いながら西平や西島をタイミングよく起用しなければ難局は乗り切れません。

気を付けなければならないのが選手のモチベーションの持続です。昨日ウィンターカップ予選が終わったばかりで、それまで今年度最後の全国大会出場の切符を賭けてその選手も母体チームを勝利に導くべく必死に練習してきたはず。そのビッグイベントが終わったばかりの今、安心したり気が抜けたりするのは当たり前。そんな選手たちの頭の中を、二九日の出発時には国体一色に切り替えさせるのが私の役目です。

長年国体に携わっていると県の裏事情がよくわかります。国体の成績はこのところ毎年天皇杯二〇位台を維持していますが、県は苦しい財政の中から二〇位台維持のための費用確保に毎年苦慮しています。そのよなことを考えると国体というのはけっしてお祭り気分で行ける大会ではありません。その重責を背負いながら二九日に長崎を発ちます。

#### 【結果報告】

初日 茨城選抜戦（八七対七八勝ち）

描いたイメージ通りに本番のコートで選手が動いてくれば監督の仕事は楽なものです。が、試合の采配というのは生身の人間を扱う仕事ですからそう簡単にはいきません。必ず思わぬ出来事が起きます。その一つ目は川上が早々と三反則を犯してしまったこと。二つ目は西平が開始早々舞い上がってしまったこと。三つ目は平川のエンジンがなかなかかからなかったこと。四つ目は後半相手の茨城選抜がゾーンを布いてきたときに藤山のスリーポイントが落ち続けたことでした。

ひとつ目は川上の張り切りすぎです。二つ目は西平初の全国大会スタメン。どちらも仕方ありません。が、三つ目は許せません。平川は国体の常連なのです。私は平川を「お前がそんな顔をしていてこの試合が

乗り切れるかあ！自分の一生を賭けて戦え！」と怒鳴りつけました。平川はハツと目が醒めて川上不在の時間帯を支えてくれました。

四つ目の思わぬ出来事（藤山のパスミス一個に続けて五本連続得意のシュートを落とすこと）が起きた時に私はタイムアウトを取り、他の四人の選手たちに言いました。「藤井がパスミスをしたからとかシュートを落とす続けているからといって俺は藤山をベンチに下げない。今のゾーンオフエンスには藤山の外角シュートが絶対に必要なんだ。このまま藤山が落とし続けるわけがない。必ず入る時は来るはずだ。それを信じてやれ」

六本目、藤山は見事にその期待に応えてくれました。平川の覚醒と藤山の六本目にやっと入ったシュートが勝敗を分けたと思います。（このことについては後日談がある）

二日目（山口選抜戦六九対六二で勝ち　しかも前半四八対二八で負けていた）

滑り出し、どの選手も身体が重いし表情も冴えなくて大変な試合でした。特に主砲の川上は絶不調。しかし後半、川上に「らしさ」が戻り、笹嶋が大切な場面で二本スリーポイントを決め、西平がカンフル剤的な働きをしてくれ、小川が持ち前のパワーで要所を繋ぎ、難局を切り抜けました。みんなありがとう。

三日目（福岡選抜戦六三対八一で負け）

二日目の深夜十二時にホームページを更新しながら「明日の福岡戦は兼頭で行く」と決めました。リハビリの様子を見ながら彼女を温存し続けてきましたが、大勝負になる福岡戦で使わなければ膝の手術を引き延ばさせた意味がありません。「もう大丈夫だろう」と思いながらも「もしまたケガをさせたら…」と迷っていた気持ちを振り払って決断しました。

結果的に彼女は存分に働いてくれました。しかし試合は負けました。インサイドの差がジリッジリッと効いてきて、最後は持ち堪えられませんでした。でも、やれることは全部やったので悔いはありません。

#### 【戦評】

一日目 茨城選抜戦

「全国大会の初戦というのはこんなものなんだよ。これが二日目の試合だったら双方もつと自分らしさを発揮できるだろうけどな」そんな戦評がピタリと当てはまる重苦しい試合だった。コート上の選手たちもベンチもスタッフも「こんなものじゃない、これは日頃の自分たちじゃない。もっとやれるはずだ」と苛立ちに翻弄されながらも生き残らなければ明日はない。それが全国大会の初戦だ。

明日、このカードがもう一度行われたらどちらが勝つかわからない。しかし、トーナメントの一発勝負に仕切り直しはない。それが勝負の世界。過酷だ。

二日目 山口選抜戦

前半、やることなすことうまく行く山口に対し、やることなすことうまくいかない長崎。

後半、空回りのまま立て直しが効かない山口に対し、じりじり追い上げて行き、次第に元気が出る長崎。

試合の様相を一言で言えばそんな試合だった。この試合を観ていた人たちの間では、後半長崎が布いた三一二のゾーンディフェンスの攻防を巡ってあれやこれやと話題になる試合だったと思う。しかしこの試合はそんな表面上の問題ではなく、日頃数多くの練習試合を重ねて相手を知り尽くしている者同士の間に行き交う微妙な心理的な作用がこのような試合の様相を作り出したのだと私は思う。

人間としての達人でないかぎり誰もが、焦り・不安・興奮・諦めなど、神のいたずらにふりまわされながら試合をする。そんなことに翻弄されなかった者が勝つ。勝負の世界の厳しさを感じさせた試合だった。

三日目 福岡選抜戦

高さで劣る長崎は森（一七九cm）に小川をマッチアップさせた。身長順にマッチアップさせても高さの八ンディはカバーできないから、小さくてもパワーのある小川で少しでも森をイヤな気分させれば勝機を見出せるのではないかという作戦だ。

それが大いに功を奏しとは言えないが長崎は突き放されずに第三ピリオドまで射程距離で就いていった。



しかし、ハイ ロー、ロー ハイを潰しに行けば三番目の選手にアシストが行くという攻撃システムが最後まで崩れなかった福岡が一気に第四ピリオドで差を広げた。

高さを守るのはスタミナを消耗する。そのツケが最後にダメージとなって出てくるという典型的なパターンの試合だった。後半、長崎は起死回生の策が出るかと思われたが山崎は動かなかった。

「後半、昨日のようにゾーンを布いて相手を翻弄して…などと甘い期待をするな。歴戦の強者揃いの中村学園に大庭と掘が加わった福岡相手に柳の下でもう一匹どじょうを見つけようとするような作戦は用いない。このままダブルチーム、スイッチ、ローテーションを執拗に繰り返す。粘れ!」。山崎のハーフタイムのことはである。

文責 山崎 純男

#### 【後日談】

初戦の茨城戦の後半、相手がゾーンを布いてきて長崎のリズムが少し狂った。この時私はタイムアウトを取って長崎西の二年生藤井を投入し、コート上の選手を全員長崎西の選手にした。「エーツ」と長崎西の尾崎先生がうるたえた。気持ちは分かる。試合がどう転ぶかわからない局面で、長崎西の選手にのしかかる重圧のことを考えたのだ。私は尾崎先生にも選手にも次のように言った。

「責任は俺が取る。ゾーンオフエンスについては俺流の考え方があるが、それを今言ったところではない。ここは、長西か純心単独のチームで戦い、そのチームのゾーンオフエンスの約束に従って戦った方がいい。で、どちらがいいかという長身の西島がいる長西がいい。長西は自分たちのゾーンオフエンスのやり方で戦え」

さらに「相手はこのままだと負けるから最後の頼みの綱で布いてきたゾーンだ。もしこれが成功しなかったら相手に打つ手は残っていない」と付け加えた。

そう言って長西の選手をコートに送り出した直後、藤井が味方ではなく目の前の相手にパスしてそれを速攻で決められた。尾崎先生は「先生!」と私に言った。長西では二年生ながらシュート力を買われて最近スタメンで使われるようになったものの、全国大会のこんな緊迫した場面で藤井を使うのは無理だと言いたいのだ。

私はコート上の選手に「大丈夫、普通に自分たちのゾーンオフエンスをやれ。藤井のシュートが一本でも決まればそれで終わるから」と言った。そして藤井は顔面蒼白になりながらも五本失敗したあと六本目にようやくスリーポイントを決めた。これで試合が決まった。